

【書評・紹介】

谷本一之著『オーロラの下に生きる人々 北の館長エッセイ』

(札幌, 共同文化社, 2009年1月, 180頁, 1500円+税)

齋藤玲子

年初に、標記の本をご恵与いただいた。筆者は当学会の顧問であり、紹介するまでもないが、民族音楽の研究者で、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の理事長でもある。そして、2003年度から評者も直接ご指導をいただいている、道立北方民族博物館の館長である。

本書は二部構成で、前半の「四季の館長エッセイ」には、北方民族博物館友の会季刊誌『Arctic Circle』の巻頭に「北風の歌の旅」として連載された22編（同誌47～68号）が掲載順に収められている。後半の第二部は「折々の記」と題されており、札幌交響楽団定期公演プログラムに寄せた3編（改訂）と書き下ろし14編を加えて構成されている。今回の出版を「博物館の宣伝」ともおっしゃっておられ、少々のお手伝いもさせていただいた身なので、書評というよりも紹介であり、いささか手前味噌的な部分もあることをご容赦願いたい。また、副題にもなっていて、ふだんどおり「谷本館長」と書かせていただく。

『北方民族 歌の旅』を出版してから2年、谷本館長はこれまでに書きためた原稿をまとめ、普及書的な本を続けて上梓している。前著は、北方諸民族の音楽文化研究を中心とした一般向けの読みものであった（同書については、本誌3号に甲地利恵氏の書評が掲載されている）。比較研究のため、1979年にベーリング海のセントローレンス島から始まった調査行は、アラスカ、カナダ、グリーンランドと東へ、そして、90年代にはシベリアへと広がり、2007年のラップランドまで実に世界一周。本書の「はじめに」に記されているとおり、館長の30年にわたる「環北極圏」の旅の間の、「現地調査、資料調査、博物館活動の経験のなかで気のついたことを、思いつくままに短い文章にまとめた」記録でもある。館長は今もフットワーク軽く各地に出かけられ、さまざまなことを教えてくださる。そんな話を聞くような気持ちで読める1冊である。

* * *

館長エッセイが連載されている季刊誌は、今年度末で70号を数えることになるが、谷本館長が就任されて1年というときに50号を迎えた。この号のエッセイは、2代目岡田宏明館長への追悼の辞であるとともに、初代・大林太良先生の頃からの館長の言葉を振り返る内容であった。

季刊誌は、博物館の展示では取り上げるのが難しい、北方地域の人々に関する新しい情報や研究の話題を紹介しようと努めている。谷本館長はその趣旨に賛同し、同誌では現代的な記事内容を発信すべきと考えておられる。エッセイでも過去の体験などを引きつつ、現在から未来を見据えた問題を提起される。何十年前の出来事であろうとも、話題は決して古びない。

表紙画像

書名の「オーロラの下に生きる人々」は、変化し続ける北極圏で今を生きる先住民を思い、現在形で題したものでしょう。連載の2回目に「オーロラの下で暮らす人々」という1編がある。1984年のカナダ北西準州ホルマン島に滞在中の話だが、毎夜オーロラを見上げる筆者に対し、居候先の主人は「あんたも物好きだね」と言いたげな顔をする。島の人々は、オーロラに関心を示さないばかりか、むしろ目をそらしているようで、なんとなく不吉な徴候とも思われているのだそうだ。他でもオーロラを愛でる現地の人には出会ったことがないという。そこに暮らす人々にとってオーロラは、外部の者が思うようなロマンチックなものではないのだ。それは、北方の先住民に対する外部の視線と、当事者の心情の違いをも表しているのではないか。

「シベリアの酩酊」「極北の酩酊」と副題の付された連続した2編は、ベニテングダケやアルコールによる社会的な問題に言及する。アラスカ先住民の祭典である通称「エスキモー・オリンピック」が、30年前と比べて盛り上がり欠ける様子を見て、文化復興の現状に通じるものでないことを願う。そうした厳しい現実も語られている。

* * *

さて、先のホルマンの居候先の奥さんというのが、アグネス・ナノガク（Agnes Nanogak Goose 1925-2001）さんで、著名なイヌイトの画家である。ここ数年、カナダ先住民の版画の研究をしている評者にとっては、関心を寄せている作家の一人であり、お会いしてみたかった人物である。ちなみに彼女が原画を描いた版画は当館に2点収蔵されており、今冬、道立近代美術館で開催された展覧会「ANIMAL FANTASY」にも出品された。また、民話に関心をお持ちの方なら、少し古いが、本多勝一氏が翻訳した『エスキモーの民話』（モーリス・メティエ編／1974年 すずさわ書店）の挿画が彼女によるものなので、ご覧になったことがあるかもしれない（図1参照）。そんな優れた作家とも親しく、直筆画を贈られたというのだから、うらやましい限りである。

アグネスさんは「北の遊び—あやとりとお手玉」でも登場する。あやとりはシベリアからアラスカ、カナダやグリーンランドと北方の各地で見られる。動物のレパートリーが多く、歌でストーリーを説明しながら動かしていくなど、「単なる遊びではなく、伝承手段かもしれない」と結ばれているとおり、ことば（音）を補う「イメージ（形）」の役目を持っていると思われる。

以前から谷本館長は、図像にこだわっておられた。最近も「図ばかりになってはどうかと

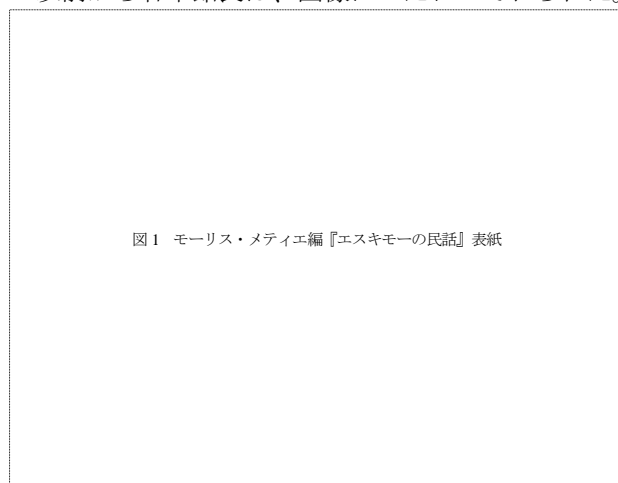


図1 モーリス・メティエ編『エスキモーの民話』表紙

思いながら、やはり百語るよりも1枚の写真・絵には説得力がある」と、おっしゃり、特に先住民自らの手による絵に関心を寄せておられる。季刊誌では紙幅の関係もあり、ふつう1枚しか写真を掲載していないが、本書では、1つのエッセイにつき平均4、5枚もの写真や図が付され、話題を具体的に示すとともに読者の理解を助けてくれる。

また、一部と二部間のカラーグラフには、ハンティ・マンシ自治管区の

熊送り（1998年）、アラスカやシベリアの民族アンサンブル、クロアチアの聖霊降臨祭（2006年）などの写真が収められている。これらをはじめ、資料的価値ももつ多数の写真や図が本書の魅力を高めている。

資料的価値といえば、1997年に書かれた「アイヌ音楽を知り始めた頃」と「北の作曲家—伊福部昭さんのことなど」の2編は、谷本館長の研究の原点に触れるもので、知里真志保、更科源蔵、服部健という諸先生との交流を記した貴重な回想録でもある。

最後に、表紙写真についてご紹介したい。谷本館長はタイトルに合うオーロラの写真、しかし、ただ美しい風景だけではなく、人が暮らす息づかいが感じられるものを探しておられた。そこで、長年の当館友の会会員で、アラスカや北海道など北の自然を撮影してこられた写真家・蝶野研二さんに相談したところ、ご協力いただくことができた。候補写真を見て、館長はイメージどおりだと喜ばれた（蝶野さんの写真は、ご本人のウェブサイト [Northward Gallery](http://www.northward-bound.com/) で見ることができる <http://www.northward-bound.com/>）。ずっと眺めていたいカバー写真である。

本書が多くの人に読まれ、北方の諸民族と私たちの接点を考える契機になることを、ともに願っている。

（さいとう・れいこ／北海道立北方民族博物館）